

平成 31 年 4 月 4 日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880223

氏名 岩本 敏

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

1. 派遣先 : 都市名 Sydney (国名 Australia )

2. 研究課題名 (和文) : 英語における単語の音韻構造に着目した子どもの発話速度の発達過程の解析

3. 派遣期間 : 平成 30 年 6 月 1 日 ~ 平成 31 年 3 月 31 日 ( 304 日間 )

4. 受入機関名・部局名 : Macquarie University

5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本派遣で従事した研究の主たる目的は、言語固有の音韻システムと発話速度の発達過程の関係を明らかにすることである。英語は Stress-based のリズムを持っていると知られており、Mora-based の日本語とは異なる特性を持っていると言われている。派遣前に日本語に関して一定の成果をあげていたため、その結果と比較するために、英語母語話者の音声が必要となった。

派遣先では、ターゲット語 5 種 (/sə.pi/, /sə..pi/, /sə.'pi/, /sə.pi.ku/, /sə.'pi.ku/) を設定し、複数の年齢群 (5 歳、9 歳、13 歳、成人) の英語母語話者 100 名以上を対象に収録実験を行った。収録した音声を音声分析ソフト Praat 上にてラベリングし、解析可能な状態にした。

その上で、有効な被験者 60 名のデータを解析した。解析対象となる特徴量は様々な要素が挙げられるが、主として、ストレスの乗っていない音節の持続時間と単語の持続時間を、単語のモーラ数・音節数ごとに比較を行った。その結果、ストレスの乗っていない音節の持続時間は 9 歳以前に獲得が完了すること、発話のリズムは (日本語の結果と異なり) 5 歳の頃から成人にいたるまでモーラではなく音節の効果を強く受けることが示された。これらの結果は、先行研究では示されていなかった結果である。

ただし、英語母語話者による認知実験の結果、複数の発話を解析から除かなければならない可能性が生じている。例えば、/sə.pi.ku/ という単語に関して、5 歳の発話は 90 文収録されたが、内 70 文は第一音節が長母音にて発音されている。このような発話を解析に含めるべきか否かの基準策定に関して、現在議論を重ねているところである。

#### 6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

音節の持続時間に関する結果は、既に論文を執筆し始めている。また、この投稿準備とは別に、11月に開催が予定されている The 44<sup>th</sup> Annual Boston University Conference on Language Development への投稿準備を進めている。これらの投稿準備と平行して、単語の持続時間に関する解析について議論を重ねている。結果が出次第、論文を執筆する予定である。

今後の研究の拡張可能性としては、観察対象となる特徴量と年齢面、そして音韻リズムの三点が挙げられる。一点目は観察対象となる特徴量の追加である。既にストレスの乗っていない音節の持続時間と単語の持続時間の解析が進行しているが、他にも母音の持続時間や文全体の持続時間など、観察対象にできる要素は多数存在する。これらの要素に関して観察を拡張する予定である。二点目は年齢面の拡張である。単語の持続時間に関する解析では、現在のところ、9歳から13歳の間で発話速度を獲得することを示唆する結果が出ている。また、6種の年齢群（5歳、7歳、9歳、11歳、13歳、成人）を使用した日本語の実験では、11歳前後で発話速度が成人と同じパターンが示された。これら2つの結果から、発話速度の発達では11歳前後が重要なタイミングであると推測される。しかし、現在のところ、11歳の英語母語話者の音声は収録していない。この点において、収録する年齢群の増加は、発達過程をより精緻に観察する上で重要である。三点目は音韻リズムの増加である。既に説明したように、英語は Stress-based の音韻リズムを有している。一方で、日本語は Mora-based の音韻リズムを有している。これら2種の他に、フランス語や韓国語など、Syllable-based の音韻リズムを有する言語が存在する。この Syllable-based の言語を観察対象に加えることで、音韻リズムと発話速度の発達過程の関係をより詳細に観察するが可能となるだろう。

#### 7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

まず、研究のためのデータそのものは、得られた内容の中で最も貴重なものである。本来、モノリンガルの外国語母語話者からのデータ収集は、被験者の募集の段階から困難を極める。それに対して、60人の有効なデータを収集できたのは、本プログラムに採用されたおかげである。

次に、英語力の向上があげられる。受け入れ先の研究者とのディスカッションや、被験者との直接のやり取りを通じて、英語でのコミュニケーションを取る能力が向上した。また、多量の論文を読んだり、英語の発表を聞いたり、プレゼンテーションを行ったりすることで、研究者として使用する英語のスキルが身についたと感じられる。

加えて、海外の研究者の研究生活を直接見た体験があげられる。シドニーで生活している研究者や大学院生の研究活動量を肌で感じられたことで、自らの今後の研究活動への良い刺激となった。

また、研究者としての人脈が広がった点も重要である。受け入れ先である Macquarie 大学の研究者のみならず、カンファレンスで知り合い連絡先を交換した研究者たちは、今後の研究を続けていく上で大いに有意義な存在である。

研究者としての財産以外に、海外での長期間生活した経験も身についている。日本以外の文化や制度、物価感覚やコミュニケーション感覚の中で生活を通して、グローバルな視点を獲得できたと自負している。

いずれの要素も、海外に身を置いて生活しなければ得がたいものである。若手研究者海外挑戦プログラムを通じて得られたものをその身に刻み、今後の研究生活に活かし、邁進したいと深く感じている。